

「神の子どもたちはみな踊る」 村上 春樹著

阪神大震災後の心の闇解く

村上春樹には以下の転換点があったと思
う。一つは『羊をめぐる冒険』次は『ノルウェ
イの森』そして『アンダーグラウンド』であ
る。この当初『地震のあとで』と題され文芸誌
に連載された五編と書き下ろし一編からなる
作品集は、もちろん三段階目に属す。

登場人物は様々である。連れ添った妻に突
然、逃げられた夫。漂流してきた材木を燃やし
焚き火をする男と密かに共感する女。神の子
の烙印を押されながらも父を探す男。遠く夕
イの地で、かつて裏切った男が震災の瓦礫で
惨たらしい死を迎えていることを望む女医
師。パブル崩壊後、東京での震災を阻止するた
め地下のコロイド状のミミズと闘う巨大蛙。
友人と離婚した女性を実は数十年思いつづけ
PTSDの症状のその娘と三人で暮らしたが
ら、生きる希望を持つ男。どれにも共通するの
は阪神大震災後の無意識に入り込んだ、自我
と色濃く遊離した影であり、人々の心理の奥
底にはそれが空虚感となって漂っている。

震災、そして地下鉄サリン事件以降、心の
闇を解くためにも制度化されていない手垢に
まみれぬ言葉を使い、新しい物語を紡ぐ必要
性があると明言した作者が、果たしてどのよ
うな作品世界を形成していくのか読者は興味
深く見ていたはずだ。ディタッチメントから
コミットメントへ。「おちら側」と「こちら
側」。ここでは光と闇、心と身体、夢と現実、
自己と非自己、奇数と偶数といった両者間の
『境界』と『通過』をテーマにリアリティー
を皮膚感覚で取り戻し、信仰や人間愛そのも
のさえも肉感性としてとらえ直そうとする姿
勢が垣間見られる。

だが、一つ疑問といつか不安感が残る。果
たして一人の作家が自らの独自の『物語』
（『深い井戸』）を出て我々の共有する現実社
会という『物語』へ文体ともども接近すると
き、「こちら側」の住人としてはそのことを
どう受けとめ咀嚼すべきなのか。いずれに
せよ、第四期への確かな胎動が感じられる作
品集であることはまちがいない。評・宮本
誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

神の子どもたちは
みな踊る
村上春樹

新潮社・1300円